

本を選ぶ

NO.415 2019年(令和1年)12月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <くろん・ぼわん>冬の風物詩
- 紙魚の繰り言 第26回
- 帰ってきた図書館員(59)
- 図書館を離れて(第45回)
- 鳥の目 第76回

●●●●●くろん・ぼわん●●●●●

冬の風物詩

「講釈師、冬は義士、夏はお化けで飯を食い」

年末が近づくとつれ、ああ、今年もまたこの季節がやってきた、とわくわくしてくる。『赤穂義士伝』——いわゆる“忠臣蔵”が、講談の高座によくかかる季節である。

芝居や映画でよく知られた“忠臣蔵”は、江戸時代元禄期に起きた赤穂事件——江戸城中松の廊下での赤穂藩主浅野内匠頭長矩による高家筆頭吉良上野介義央への刃傷事件、四十七士による吉良邸討入り——を題材に描いた物語である。

刃傷事件が起きたのは元禄14(1701)年3月14日。事件後すぐに劇化され、瓦版や講釈、浮世草子などでも広く庶民の間に伝わっていった。そして討入りから四十数年後に人形浄瑠璃、続いて歌舞伎で上演された『仮名手本忠臣蔵』が大当たり。現在まで繰り返し上演される決定版となった。

講談では、同じ赤穂浪士の討入りを扱った話を『赤穂義士伝』もしくは『義士伝』と呼ぶ。『仮名手本忠臣蔵』上演以降、実録的な姿勢をとる講談においても、刃傷事件から吉良邸討入りまでの流れを追った「本伝」のほか、四十七士の逸話「銘々伝」、事件を取り巻く人々の逸話「外伝」、と様々な物語が生み出され、講談を代表する演目となっ

ていった。

幕末期から明治時代になると、講談『義士伝』からの逸話を取り込んだ歌舞伎作品が次々と上演される。浪曲や落語などにも広がりを見せ、小説や映画、テレビと、後に“忠臣蔵もの”と呼ばれるジャンルの形成につながっていくのである。

映画の、雪が降りしきる中での討入りシーンのイメージからだろうか。“忠臣蔵”にはやはり冬がよく似合う。かつて年末年始には、毎年のようにテレビドラマを放送していた記憶がある。だからこそ小さい頃から馴染みがあったし、松の廊下や討入りの場面など、なんとはなく見知っていたものだった。ドリフのコントやアニメでパロディが成立したのも、みんなが知っている、という前提があったからだろう。

『戦後「忠臣蔵」映画の全貌』(谷川建司著/集英社/2013年)は、映画のみならず、テレビドラマも網羅した一冊だ。“忠臣蔵もの”コンテンツの成立と発展、時代による価値観の変化の中での変質を論じており、資料としても素晴らしい。

最近では“忠臣蔵”どころか時代劇自体も減っているが、今年久しぶりに“忠臣蔵もの”コメディ映画が公開された。これを機に、馴染みの薄い若い世代が物語の成り立ちにも興味を持ち、講談も聞いてみよう、などとつながっていけば、うれしい。

小説を読んで映画をみて、講談を聞いて歌舞伎を観て……と、二重三重にも楽しみが広がっていくのが“忠臣蔵もの”の醍醐味だ。この冬もどっぷりと、満喫し尽くしたい。(ささきえり)

死と再生の物語

大食いネコの話の、ネコに飲み込まれた人たちがお腹から生還する過程について、再三、死と再生の物語であると述べてきました。改めて確認しておきたいところです。

以前、グリムの「オオカミと七ひきの子ヤギ」をめぐって、オオカミに「飲み込まれて生還することによって元気になるのは、心の成長過程（過去の未熟な人格が死んでレベルアップしてよみがえる過程）を象徴的に物語っている」という矢吹省司の説を紹介しました。

つまり、「オオカミと七ひきの子ヤギ」もまた死と再生の物語なのです。死と再生の物語は死を経て再生することによって、それまでより成長した存在に生まれ変わることができる可能性がある。飲み込まれて死ぬのか、指に錘が刺さって死ぬのか、毒リンゴを食べて死ぬのか、死に至る行為がどのような形であれ、結果として死が訪れれば、その後再生する過程で新しい生をスタートさせることができるかもしれないのです。もちろん、現実にはいったん死んだものが再び甦えるなんてことはありえませんが、成長するという事はそれだけ大変なことというわけですね。

「ねむり姫」の昔話では、ねむり姫は百年の眠り——お話では十二人目の占い女が死の呪いを取り消すことはできず、代わりに眠りに変えたことになっていますが、本質的には死ぬのと変わりはないでしょう——の後、伴侶となる王子と出会うのですが、14世紀に古フランス語で書かれたねむり姫の類話『ペルセフォレ』では、求愛者である王子は眠っている姫と愛の床を共にして、姫は眠ったままで子どもを産むのです。^{*1} 明らかに、これはねむり姫が死と再生の過程で思春期を迎え、成熟するということを意味しています。グリムの「ねむり姫」では子どもを産むという直接的な表現はありませんが、意味するところは同じです。

*1 詳しくは 浜本隆志『ねむり姫の謎—糸つむぎ部

屋の性愛史』講談社現代新書／1999 参照

白雪姫も女性の成長という点では同じでしょう。毒リンゴを食べて死んでしまい、ガラスの棺に横たわっている白雪姫を見つけた王子が棺を家来に運ばせている途中、棺が揺れた振動で白雪姫の喉に詰まったリンゴが取れて、姫は甦るのです。初め、まま母の王妃に殺されそうになった時、白雪姫はわずか7歳ということになっています。それが森で小人たちに守られて成長し、死を経て、ガラスの棺という誰にでもはつきりとその成熟ぶりが見てとれる存在になったがゆえに、王子に見そめられるということです。^{*2} ねむり姫と白雪姫は死と再生の物語なのです。

*2 矢吹省司は「つまり「子どものわたしが死んで大人のわたしに生まれ変わる」という構成——この「死と新生」、「二度目の誕生」こそが、常に変わらぬ成人のテーマなのです」と指摘しています。矢吹省司『グリムはこのころの診察室』平凡社／1993

さらに、あの赤ずきんの話もオオカミに食べられても助けだされるという、グリムによるエピソードの追加の結果、死と再生の物語の側面が強くなったというべきでしょう。

『キャットウーマン』は？

グリムの昔話では、死と再生の物語は子どもから大人への成長の物語ですが、現代の話となると様相が違います。映画『キャットウーマン』では主人公は悪漢に命を奪われますが、バスデト神によって新たな命を授けられます。その結果、キャットウーマンとしての驚異的な身体能力を手に入れます。バスケットボールではゴールのバスケットに軽々と跳びついたり。加えて、それまでのおとなしい、おどおどとした態度の、自信のなさそうな性格（名前が「ペイシェンス」!）が一変して、職場で上司に物おじしないではつきりと話をする、何事にも積極的な性格に、変貌を遂げたのでした。象徴的なのが髪を切って、バイクを乗りこなすシー

ンです。まさに死と再生の物語です。

ところで、トム・クルーズ主演の映画『オール・ユー・ニード・イズ・キル』（原作は桜坂洋のライトノベル『All You Need Is Kill』。映画の原題は“Edge of Tomorrow”）では、主人公は死ぬと、必ずタイムループして特定の時間に戻り、人生をやり直すことができるようになるという設定になっています。ただ、主人公の意識は継続しているので、経験値を上げることができる。まあ、成長はしていると思います。おかげで主人公は何回も死んでは過去に戻ることを繰り返して、タフな戦士に育ち、異星人との戦いに勝利するという話ですが、この場合の死は、ちょっと死と再生の物語とは違うように思います。どちらかと言えば、かつて子どもたちがファミコンのゲームでうまくいかない時に、ばちっと電源を切ってしまうと強制的にリセットしてしまっていた、あの感覚に似ているのです。死というより一時中断です。だから、映画の中でも、訓練でけがを負った時に治療して時間をかけるよりは死んでしまった方が早いと判断して、殺されてしまうシーンがあったと記憶しています。「死」の扱い方が軽くて、単なる方便に過ぎないのです。

死と再生の結果？

ここで改めて振り返ってみると、ねむり姫や白雪姫が死と再生の物語というのは分かるが、大食いネコの系列の話には、死と再生に伴う成長という要素はないのではないかという疑問が湧いてきました。

以前、死と再生の物語について取り上げた時は、ネコの「お腹の中の暗闇に飲み込まれ、再び生まれることにより、新たな力を宿して、よみがえる」と述べました。これは自然の移ろいから発想されたことで、月は満月から徐々にやせ細って、姿をなくしても、再び満月になって復活します。太陽は毎朝東の空に生れ、暖かい光を放ち、西の空に沈んで眠ります。つまり、成長ではないのですが、

充電といいますか、死と再生の過程を経て失われたエネルギーが再び補充される。たとえば、エジプト神話の神ラーは天の女神ヌトから生れ、昼と夜の世界を旅し、悪しき蛇アポピスと戦い、旅が終わると、ヌトの体の中に帰り、再び生れ出る時を待つというのです。これもまた死と再生の物語です。

この物語で重要なことは、死と再生の循環がいつまでも続くことと、再生する存在の同一性ではないのでしょうか？ つまり、昨日の月と今日の月と明日の月とが同じ月でなければ、言い換えると、いずれの月も一つの月の異なる側面であることが確かであれば、月のみちかけという考え方は成立しません。空にある月が同じ月であるからこそ、死と再生の過程がありえるのです。それぞれが別の月であれば、いつか月が存在しなくなる可能性もあることになってしまいます。

死と再生の物語で重要なのは死んだ存在と再生した存在が間違いなく同一の存在であること、継続した存在であることなのです。グリムのねむり姫において、姫が百年の眠りにつくと同時に、城の中の全ての物、暖炉の火までもが眠りにつき、姫が目覚めると同時に再び動き始めるというのは、継続性を強調する効果があります。

同様に、大食いネコのお腹から飲み込まれた人たちが飲み込まれた時の状態で出てくるのも、この継続性を強調するためとも考えられます。

『エジプトの神々』（池上正太著／新紀元社／2004）によれば、「日の出と日没というサイクルの中で、ラーは生誕と死を繰り返して永遠の時を旅するので」あり、「こうした生死観は当時のエジプトの人々にとって一般的なものであり、彼らにとって死は新たな旅立ちでもあった」ということでした。大食いネコの系列の話もまた新たな旅立ちを意味しているのでしょうか？ 死と再生の物語には、人間の命への憧れが込められています。

（さかべ たけし）

帰ってきた図書館員 (59)

—図書館の歴史を振り返る—

山下 青葉

購入時よりは予約件数が減ったものの、今年5月に発売された中島京子の『夢見る帝国図書館』（文藝春秋）は図書館ではなかなかのヒット作であった。雑誌の書評で取り上げられているのしばしば見かけたように思う。私の周囲でもタイトルにひかれて読んだ図書館員が少なからずいた。

この本は、主人公の「わたし」が上野公園で出会った喜和子さんという謎めいた初老の女性から帝国図書館を主人公にした小説の執筆を依頼されたことにより、喜和子さんの家の下宿人の藝大生、元カレ？の大学教授、娘と孫と共に喜和子さんの思い出をたどり、帝国図書館をめぐる喜和子さんの人生と幻の絵本の謎を追ってゆく物語である。

図書館ものというだけでなく、年の離れた女性同士の友情ものとしても楽しく読める物語だが、私としては、作中の各章の終わりに書かれていた本作と同タイトルの、主人公が喜和子さんの依頼を受けて執筆した小説が面白かった。

この作中作は全部で25の章からなり、明治新政府がビブリオテーキ（図書館）を作ることを思いついたという前史に始まり、戦後国立国会図書館支部上野図書館となった帝国図書館の前で、後に一緒に暮らすことになる復員兵の「お兄さん」が喜和子さんとお会うというエピソードで終わっている。

小説仕立てではあるが、内容は図書館近代史で、日本初の近代図書館である書籍館しょじやくかんの変遷、上野の地に移り、帝国図書館となつてからの数々のエピソードは、多少図書館史をかじった者にとっては懐かしいものであった。また、帝国図書館を利用した作家達の物語も楽しく読めた。

不勉強のためだと思うが、書籍館の館長補としてその発展のため大活躍をしたのが、永井荷風の父、久一郎だったというのもここで初めて知った。

そんな折、たまたま、新聞の書評で『図書館の日本史』（新藤透 勉誠出版 2019年）という本を見かけ、この際、図書館史を久しぶりに勉強し直そう

という気持ちになり、勤務先の図書館で所蔵していたこともあって、読んでみたのだった。

こちらの本は、図書館の名称が使われていなかった、それこそ古代から「夢見る帝国図書館」の時代を経て現代に至るまでの図書館の歴史を、古代・中世・近世・近代の章に分けてまとめたもので、各章の最後にその章のまとめがつけられていて、とてもわかりやすい作りになっていた。

学生時代に司書課程を学んでいた時に、イギリスやアメリカと違い、日本の図書館は市民が作ったものではなく、お上から与えられたものだから、図書館が発展しない理由はそのような図書館の成り立ちの違いにあるのだという話を聞いたことがあり、それを今まで何となく信じていて、図書館の歴史は近代から始まるのであってそれ以前に図書館は存在しないと思っていた。

確かに、図書館の名称が使われるようになったのは明治になってからだが、それより前、古代では律令国家の成立に伴い「ずしよりょう図書寮」という国立図書館に当たる組織が設置され、中世では文化の担い手が皇族や貴族から武士に移り、図書館活動的なものも武士が行うようになっていくこと（金沢文庫の設立はこの時代）、近世になると、藩士の子弟のための「藩校」が各藩に設置され、今の大学図書館等に当たる文庫が設けられ館外貸出や夜間開館を行っていたところがあったこと、また「蔵書の家」という大量の蔵書を有していた名主が村人に無償貸出を行っていたことなど、今日の図書館に当たる活動が各時代にさまざまなかたちで存在していたのを知ることができ、本当に勉強になった。

近代以降は図書館は「官」主導で整備され、それは決して悪いことではなかったのだが、画一的・硬直化してしまった面もあり、今いろいろな意味で曲がり角にきているのは否めない。

これからの図書館がどうあるべきか、歴史を振り返って考えるということを今回学んだように思う。

（やました あおば：図書館員）

図書館を離れて (第45回)

—戦前の「図書館員」③—

並木 せつ子

引き続き、「図書館員」に関する新聞記事から、戦前の図書館員がどのように新聞にとりあげられていたか垣間みてみたい。

見出しを原文のまま古い順に並べ、／の後には記事の要約を記した。教習所等名称は種々使用されているが新聞記載のままとした。

1937 (昭12) 年3月 月謝の要らぬ図書館講習所；司書の卵・三州名募集／資格中学校女学校卒。30名。修業年限1か年。試験科目は1次が国語、地理、歴史、英語。2次は口頭試問・身体検査。図書館での仕事風景を撮った写真（着物に割烹着姿の女性が仕事をしている）が掲載されている。

1937 (昭12) 年3月 書物に触らねば虫が治まらない；藤山図書館の司書格を勤める三澤義子さん／家庭欄の「紅一点記」という人物紹介記事。三澤さんは25歳、図書館員養成所で1年学んだ後、藤山図書館に勤務。カソリックの聖心学院出の令嬢がどうして「地味な図書館員など選んだのか、一寸腑に落ちかねる」という問いに「無闇に本が好きで…」と答えるも、「お嫁にいつてからも務めるのは大変ぢゃあないか」と思っていて、「司書生活と結婚生活は両立させたくない」らしいとのこと。書架の前に立つ事務服姿の三澤さんの写真が掲載されている。

1938 (昭13) 年12月 華府へ邦人司書／ワシントンにある図書館の東洋部に、奈良県天理図書館主任司書仙田正雄氏が派遣されることになった。既に日本部長には坂西しほ氏が働いている。

1940 (昭15) 年5月 古書を写す婦人；意外なところに新しい職業／記者の取材に対し、上野図書館職員の高橋千代子さんが、図書館の本や利用者について答えている。「婦人は古書など読まぬでせうね」という質問には、古書を写すために「毎日通っていらっしゃる婦人が二、三名あります」と。書架の前で本を開いて見ている着物姿の女性の写真が掲載されている。

1941年太平洋戦争が始まると、図書館員に関する記事はほとんど見られなくなり、第1回目から

ずっと5名前後だった図書館員養成所の女性の卒業生数は、1942年3月以降はほぼ半数を占めるようになった。それも1943年12月第23回の26名の卒業生で途絶え、『図書館雑誌』も1944年5月で休刊になる。

こうして見ると作爲的に選んだわけではないのに、女性図書館員に関する記事が目につく。養成所に入学しただけで姓名が掲載され、顔写真まで載る。男性図書館員の記事は少ないだけでなく、顔写真が載るほど華やかにとりあげられていない。まだ職業婦人が少ないという時代背景の中で、図書館員になるための学校に行くだけで珍しかったのだろう。それでも、「図書館に勤めさせる心算はない」という親や、「すすめられるままに志願」「仕事につく友人がいないから決まり悪い」「お嫁にいつてからも務めるのは大変」という本人の言葉からは、仕事に対してあまり積極的ではない姿勢も感じとれる。

それにしても、「図書館は女性に向けた職業」ということが、1919年の記事を皮切りにしつこいほどくりかえされている。昭和初期に出版された種々の職業案内本や女性向け雑誌でも、タイピスト、交換手、女看守、エレベーターガール、ガソリンガールなどと、女性向き職業として必ず登場するのが図書館員だった。この点は百年たってもあまり世間の見方は変わってないと思った次第である。(了) (なみき せつこ:元図書館員)

【参考資料】

「女性図書館員の誕生」(宮崎真紀子著『図書館界』1996年3月)／「日本における女性図書館員文献目録」(赤瀬美穂著『現代の図書館』1986年12月)／「我が国婦人図書館員論の軌跡」(佐倉由美子著『白山情報図書館学会誌(1)(2)』1997年8月・1998年6月)／『図書館雑誌』にあらわれた婦人図書館員のあゆみ1・2」(山本芳枝著『図書館学』1976年10月・1978年3月)『現代婦人職業案内』(主婦の友社1926年)／『東京女子就職案内』(新人社1936年)

2019年は地球温暖化の危機意識が世界的に一段と高まった年として記憶されるでしょう。それを象徴するのがスウェーデンの16歳の環境活動家グreta・トゥンベリさんの勇気ある行動と、それに呼応し「気候危機は子どもたちの危機だ」と立ち上がった世界の若者たちの声です。またブラジル・アマゾンの大規模な森林火災、日本では台風15号、19号などの記録的な大雨による各地の甚大な被害が、気候変動の脅威を実感させました。

現在、国の天然記念物で絶滅の恐れがあるライチョウを守るため、南アルプスの北岳でライチョウのひなの「ケージ保護」を行っている日本のライチョウ研究の第一人者、中村浩志信州大学名誉教授は、著書『雷鳥が語りかけるもの』（山と溪谷社／2006年9月）の中で、「年平均気温が2℃以上上昇した場合、日本のライチョウは絶滅する可能性がきわめて高くなると考えられる」と早くから警告しています。

1900年から2000年までの百年間に日本では、年平均気温が1.0度上昇し、とりわけ最近の10年間で0.2度上昇しており、上昇率は最近ほど急激になっています。世界気象機関（WMO）の発表（12月3日）は、今年の世界の平均気温は過去2番目か3番目に高い年になると見通し、この5年間（15～19年）や10年間（10～19年）の平均は過去最高になるのがほぼ確実で、このままでは今世紀末までに産業革命前（1850～1900年）と比べ平均気温が3度以上上昇し、人類にかかってないような害をもたらすと警告しています。

気温が上昇すれば、森林限界が上がり、繁殖に必要ななわばりが消滅・縮小し、ハイマツなど低木針葉樹やお花畑などライチョウが生活できる高山帯の面積が狭まります。しかも近年、ニホンザル、キツネ、ハシボソガラスなどが高山帯に進出し始め、ひなを襲うケースが増えています。「ライチョウは、日本で真っ先に温暖化の影響を受ける動物と考えられる」と中村さんは言います。

人を恐れない日本のライチョウ

私は1970年代初めモンゴルでウランバートルの自然博物館を見学したとき、剥製のライチョウの前で良い葉になる鳥との説明を受け、ライチョウが狩猟鳥であることを知り驚いた記憶があります。前記著書で中村さんがアリューシャン列島で初めて国外のライチョウと出会った体験記を読んだとき、私のこの古い記憶を思い出しました。

中村さんは1993年の夏、アリューシャン列島での登山学術調査隊に参加し、ウナラカス島のマクシン峰に登る途中、土砂が堆積した標高100メートルほどの丘にさしかかったとき、およそ50mさきの草の陰から、ライチョウが姿を見せました。「ついに見つけた！と思った瞬間、ライチョウはなんと飛んで逃げたのだった。じつにあっけない、最初の出会いであった」と書かれています。次に見つけたもう一羽のライチョウも、やはり飛んで逃げる姿しか観察できなかったそうです。「これは私にとって予想外の出来事だった」と中村さんはその体験を語っています。ひな7羽の雌親に出会ったとき親鳥が羽を広げて傷ついたふりをする擬傷行動をしました。日本のライチョウは人を恐れず、人間を見て飛んで逃げることはありません。数人でライチョウを取り囲んでじっくり観察でき、擬傷行動をすることはないとのこと。

中村さんはこのアリューシヤでの体験で、ライチョウは先住民の昔から一般に狩猟の対象であり、日本にだけ高山に隔離された特殊な存在として生き延びてきたことに気づき、以後本格的にライチョウにかかわる契機になったと述べています。

世界最南端で生きる

ライチョウはキジ目ライチョウ科の鳥で、北極圏を中心に世界に24の亜種がいます。日本固有のニホンライチョウを含め極東には7亜種が分布します。日本のように高山に生息する亜種は、フランスとスペインの国境のピレネー山脈とアルプス山脈の

ライチョウだけで、多くはユーラシア大陸と北アメリカの北極海沿岸のツンドラ地帯に分布しています。日本はライチョウの分布の最南端で、日本に一番近い生息地は北千島の島、シユムシユ、パラムシル、オネコタン、ハリムコタン、シアシュコタンです（『ロシア極東の鳥』ロシア科学アカデミー極東支部生物学・土壌科学研究／2009年）。

日本でライチョウが文献上初めて現れるのは、鎌倉時代後期の『夫木和歌抄』（1200年）に載る後鳥羽院が詠まれた和歌「しら山の松の木陰にかくろへてやすらかにすめるらいのとりかな」においてです。日本では古くから山岳信仰と結びついてライチョウは霊山に住む「神の鳥」でした。江戸時代には加賀藩が積極的に白山や立山のライチョウを保護したことが知られています。

日本のライチョウの分布は、最北が頸城山塊の火打山と焼山で、北アルプスの朝日岳から奥穂高岳、その南の独立峰の乗鞍岳と御嶽山、そして南アルプスの甲斐駒ヶ岳から光岳にかけてです。1980年代は約3000羽が推定されていましたが、2000年代には2000羽弱に減少したと推定され（信州大学）、環境省レッドリストで絶滅危惧1B類（過去10年で50～70%減少）に指定されています。

ライチョウはおよそ2万年前、氷河時代に地続

きだった大陸からサハリンやカムチャツカ半島を経由して本州に渡来し、その後沖積世に入って温暖化が進み多くは北に退きますが、寒冷な高山に逃れ隔離分布した集団がいました。それが現在まで中部地方の高山に生息する亜種のニホンライチョウです。東北地方や北海道の山にはライチョウはいません。日本で生き残るには3000m級の高山と餌になる針葉樹の芽や種子が得られるハイマツで覆われた広い面積が必要であり、ライチョウが日本で絶滅せずに生き延びているのは奇跡に近いと言われています。

ライチョウの学名は *Lagopus mutus* です。直訳すれば「ウサギ足のだんまり屋」。ライチョウは他の鳥に比べてあまり鳴かず、指先まで羽毛が生えて、ウサギの足に似ているからだそうです。中村さんは先の著書で言います—「ライチョウはただ黙って、滅びを待っているかのように見える」、しかし「今も変わらず人を恐れない姿で、彼らはいったい、何を語ろうとしているのか」と。

迎え入れる慈悲深い高山があった沖積世とは違い、現代の急激な温暖化の中で行き場のないライチョウの声なき声を、私たち人間は聞く力をもっているのでしょうか。

（ためさだ さだと：さいたま市図書館友の会）